

加賀の千代女

皆さんは、

「朝顔や つるべとられて もらひ水」

という俳句を知っていますか？

JR松任駅の前には井戸が作ってあって

そこに、この俳句が書かれています。

この句は 千代女という人がつくったもので

とても有名な俳句なのです。

では、これから この千代女について

お話ししましょう。

(ぬく)

(一)

江戸時代、今から三百年ぐらい前のことです。

千代は松任の大町の表具屋さんに生まれました。

表具屋さんというのは、掛け軸やふすまを仕立てる仕事で、家の中にはいつもきれいな絵や俳句がたくさんありました。

そんな家に生まれた千代は幼い頃から読み書きが大好きでした。

千代が七才になったある日のこと

(ぬきながら真ん中あたりで止めて)

友だち「千代ちゃん、遊ばんが!」

千代「うん、外に行こうか。」

と、いつものように友だちと元気よく外へ飛び出していきました。

そして、鬼ごっこをして遊んでいたその時、

「グワッ　グワッ　グワッ」

(残りをぬく)

(11)

友だち「あつ、千代ちゃん 空を見てみ！鳥がたくさん飛んどる。」

千代「本当や。あの鳥知つとる？雁っていうげんよ。」

何羽おるがかな？一羽、二羽、三羽……あーわからんがになってしまった。」

夕やけに向かつて、雁の群が飛んでいきました。

やがて雁の群は見えなくなってしまいました。千代にとってその光景と

鳴き声は心に深く残ったのでした。

そして千代は雁の群れを眺めているうちに、ある言葉を口ずさんでいました。

| 1 / 2

(ぬきながら1/3あたりで止めて)

千代「お父さん、今日遊んどる時ね、雁が飛んどったよ。くの字みたいな形でいっぱい飛んどったよ。」

父 「ほつか。ああ、もう初雁の季節やなあ。」

ふつと千代の口から雁を見ていたときに浮かんだ言葉が出てきました。

千代「初雁や ならべて聞くは 惜しいこと」

(残りをさつと抜いて)

(三)

母 「千代、それ俳句やがいね。うまいもんやねー。」

父 「ほお、うまいもんやな。雁はみんなで一緒になって鳴くもんやしな
ー。」

お父さんとお母さんはびっくりしました。

それからというもの、千代はいろんな俳句をつくり、お父さんお母さん
を何度も驚かせたのでした。

1 / 3

(すこし間をおいて 1 / 2めいて)

ある晩のこと。お父さんとお母さんは千代がねむりについたころ、ふたりで
千代のことについて話をしました。

父 「ため息(千代には本当)びっくりするわ。あんなに小さいが、
すらすらと俳句をつくるんやしな。わしは最近、千代には俳句の
才能があるんじゃないかと思うようになってなあ。

(間)

なあ母さん、千代に俳句の勉強をさせてやったらどうなる?。」

母 「えっ! (少し間をおいて)

ほやねー。私も千代のことを考えとったんや。千代も、もっ
十二才になったことやし、ちょっといいころかもしれんねえ
...。」

お父さんとお母さんがこんな話しをしていたころ、

(残りをさっとぬいて)

(四)

千代はとなりでぐっすりと、ねむっていました。

(すこしの間)

こうして千代は、家を離れて松任のおとなりの町 美川の俳句の先生、

北潟屋半睡きたかたやはなすいさんのもとで俳句の勉強をすることになりました。

千代は、家事を手伝いながら俳句を教えてもらい、一生懸命勉強しました。

(ぬきながら)

ある日半睡先生が千代にこう言いました。

(五)

半睡先生「千代、本当によくがんばったなあ。

たった二年の間にほんとにうまくなったよ。」

千代「いいえ、半睡先生がいろいろと教えて下さったおかげです。ありがとうございます。」

(間を取って)

半睡先生「私が千代に教えられることは、すべて教えたから、そろそろお家に帰りなさい。」

千代「えっ(間)半睡先生、わたしなどまだまだです。

これから先生の元で勉強させてください。」

半睡先生「いやいや千代、俳句というのは人に教えてもろてつくものじゃない。自分の気持ちを十七文字の言葉に込めてよむものや。おまえは十分力もついたし、これからは自分で俳句をつくっていきなさい。」

こうして千代は二年間の俳句の勉強を終えて、十四才の春、松任の家に帰りました。そして家の仕事を手伝いながら、好きな俳句をつくりつつけました。

(間を取って)

千代が十七才のある夏の日、日本一の俳句の先生、松尾芭蕉のお弟子さんで、かがみしこう各務支考さんという人が千代の家にやってきました。

(2/3ぬいて)

各務支考「じゃあ、千代さん、いなづま・かきつばたという言葉を使って俳句をつくってみてください。」

千代「いなづま…、かきつばた…。うーん…」(間)考えこむ様子で

各務支考「千代さん、俳句は自分の感じたことを素直に詠んだらいいんですよ。」

千代「素直に…。そうだ!」

(ちゅとぬいて)

(六)

千代 「稻妻の裾をぬらすや水の上」(二回復唱)

「行春の尾やそのままにかきつばた」(二回復唱)

各務支考「うーん。二つともすばらしい出来ですね。」

各務先生は千代の俳句の才能にとっても驚きました。

そしてそのことは、たちまち日本中に広まり、千代をはとても有名になりました。

(1 / 3 ぬいて)

そして次の年、千代は十八才で金沢に住む弥八さんと結婚しました。

弥八さんは勉強が好きでひとりで、結婚してからも千代に好きな俳句をつくらせてくれました。

千代はとても幸せでした。

(少しの間)

2 / 3

|

しかし、幸せは長くは続きませんでした。

千代が二〇才のとき、弥八さんが病気で死んでしまったのです。

千代は泣く泣く松任の家に帰ったのです。

(少しの間 さらに 1 / 3 ぬいて)

傷ついた千代を支えてくれたのが千代の好きな俳句でした。

千代は自分の人生を俳句に打ち込むことに決め、いろんなところを旅して、たくさん仲間や先生たちと交流しました。

(全部ぬいて)

(七)

ところが、さらに千代が三十才をすぎた頃、千代のお父さんとお母さんとお兄さんがつづけて亡くなりました。

千代は、ふかく悲しみながらも、店をひとりであっていかなくはならず、俳句をつくるひまもないくらい忙しく働きました。

(少しの間)

(1/2ぬいて)

そんな忙しい生活は何年も続き、千代は店を手伝ってくれる人を探すことにしたのです。

(残りをぬいて)

| 2 / 3

| 1 / 3

(八)

そして六兵衛さん・なをさんという夫婦が来てくれました。

二人は千代といっしょに、一生懸命働いてくれました。

やがて千代は、ふたりに自分の子供になってもらい、お店の仕事を任せるようになったのです。

(ぬく)

(九)

スツ・スツ・スツ、スツ・スツ・スツ

千代は五十二才になりました。

千代は、この年の冬、髪の毛をそり、尼さんになりました。

そして、これまでの長い髪を思い出しながら、俳句をつくったのです。

「髪を結う手の隙あけて炬燵かな」

この俳句は「尼になって髪を手入れすることもないので、こたつにあたりながら、これからも俳句を勉強したいのです。」という気持ちを詠んだものです。

千代が尼さんになってから九年がたったある日、すばらしい事件がおこりました。

(1/3ぬきながら)

ドタドタドタ!

な を「おかーさん。大変ですよ。お殿様から手紙がとどきましたよ!」

それは加賀藩のお殿様からの手紙でした。

手紙には、日本に朝鮮の人達が来るので、そのお土産に千代の俳句を差し上げたい。それでお殿様に俳句を届けるように、と書いてありました。

(残りをぬく)

(十)

なを「すばらしいことじゃないですか！お母さん良かったですね！」

千代「ええ、ええ、わたしもうれしくてうれしくて…真心をこめて作らせてもらいますよ。」

千代は21の俳句をきれいな掛け軸と扇に書いて、お殿様に納めました。

| 1 / 3

このように千代の名前は全国に知れわたり、千代の俳句集がつくられました。

この当時、生きている間に俳句集がつくられることは大変めずらしく、特に女の人の俳句が本になったということはすごいことだったので。

ただあまりにも有名になったので、

(ちつとぬいて)

(十一)

体の具合が悪くても、手を振るわせながら、がんばって文章を書き上げたりしなければならなかったのです。

その中には、当時有名な俳句の先生だった、与謝蕪村さんから文章を書いてほしいというお願いもあったので、千代は一生懸命がんばりました。

(ゆっくりぬく)

(十二)

「月もみて我はこの世をかしく哉」(二回復唱)

これは千代が最後につくった俳句です。

千代は一生懸命生きて何も思い残すことがないという気持ちをこめて、

この俳句をつくりました。

千代は幼い頃から亡くなるまで、たくさんすばらしい俳句を残しました。

「百なりや 蔓一すじの 心より」

「蝶々や何を夢見て羽づかひ」

「ころぶ人を笑ふてころぶ雪見哉」……

千代がつくってきた俳句には自然に対するやさしい心があふれ、

どの俳句を読んでもやさしい気持ちになってきます。

皆さんもぜひ千代の俳句を読んでみてください。

おわり